

平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点 (国語・国語総合)

1. 今回の調査結果のポイント

【ペーパーテスト調査】

- 通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数は、全47問中35問であった。下回ると考えられる12問のうち9問が古典に関する問題であった。
- 前回調査(平成14年度調査)と同一の問題を10問出題したが、そのうち通過率が前回は有意に上回った問題が1問、前回は有意に下回った問題は5問(うち古典が3問)であった。
- 求答式・記述式問題において無解答率が15%を超えた問題は、全28問中13問と前回調査の全22問中7問より、その割合が増加した。

<話すこと・聞くこと>

- 記述式問題も含めたすべての問題の通過率が、設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。
- 新たに領域化された「話すこと・聞くこと」の指導の成果が上がってきているといえる。

<書くこと>

- グラフから読み取ったことについて書くことと、手紙を書くことの2つの記述式問題については、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。ただ、関連して出題した、手紙文の頭語を書く問題は設定通過率を下回ると考えられる。
- 「手紙や通知を書くこと」を指導していると回答した教師の割合が、前回に比べて約11ポイント増加した。
- 新たに領域化された「書くこと」の指導の成果が上がってきているといえるが、基礎・基本となる知識・技能については課題がみられた。

<読むこと>

- 近代以降の文章を読んで答える問題は、記述式問題も含めたすべての問題の通過率が、設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。
- 古典(古文・漢文)を読んで答える問題では、全8問中5問で通過率が設定通過率を下回ると考えられる。また、関連して出題した文語や訓読のきまりについての問題でも、全4問で通過率が設定通過率を下回ると考えられる。
- 前回調査と同一問題(古典(古文))の通過率を比較すると、前回と有意に差がないものが1問、前回は有意に下回っているものが3問であった。
- 近代以降の文章を読む能力は身に付いていると考えられるが、古典を読む能力、古典に関連する知識・技能については課題がみられた。

<言語事項>

- 「言語事項」として単独で出題した問題では、18問中16問で通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられ、言語に関する知識・技能はおおむね身に付いていると考えられる。しかし、国語の語彙の構造的な仕組みを問う記述式問題で、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。
- 前回調査と同一問題の通過率を比較すると、全6問中、漢字の熟語に関する1問で通過率が有意に上回り、漢字の読み書きに関する2問で通過率が有意に下回った。

【質問紙調査】

- 「国語の勉強は大切だ」において肯定的な回答をした生徒に比べ、「国語の勉強が好きだ」において肯定的な回答をした生徒の割合が低いという、前回と同様の傾向がみられた。
- 読書を習慣化させるための特別な取組を行っているとは回答した教師が、前回に比べて約9ポイント増加した。
- 「人前でスピーチや説明をすること」や「文学的な文章を読むこと」などにおいて、教師と生徒の意識差が見られる。教師は「生徒は興味を持ちやすい」と回答している割合が多いのに対して、生徒は「嫌いだ」と回答している割合が多かった。

2. 今回の調査結果の特色

(1) 現行高等学校学習指導要領(平成11年告示)の改訂の要点等

教科・科目の目標は、次のような点を重視して改善が図られた。

- ・ 互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う力を育成すること
- ・ 社会人として必要とされる言語能力を確実に育成すること
特に、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面に応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てること
- ・ 文学的な文章の読解に偏らず、様々な文章を読んだり、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てたりすること

上記の指導をより効果的に行うために、領域構成については、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと的能力が調和的に育成されるよう、従来の「表現」、「理解」及び「言語事項」の2領域1事項での構成を改め、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び「言語事項」の3領域1事項で構成することとした。また、指導内容と言語活動の密接な関連を図り、生徒の主体的な学習活動を重視しながら学習の効果を上げるために、新たに言語活動例を示した。

科目の構成は以下のように改められた。

平成元年告示		平成11年告示	
科目名	標準単位数	科目名	標準単位数
国語Ⅰ	4	国語表現Ⅰ	2
国語Ⅱ	4	国語表現Ⅱ	2
国語表現	2	国語総合	4
現代文	4	現代文	4
現代語	2	古典	4
古典Ⅰ	3	古典講読	2
古典Ⅱ	3		
古典講読	2		

必履修科目については、「国語表現Ⅰ」又は「国語総合」のいずれかから選択し履修することとなっている（平成元年版の学習指導要領では、必履修科目は「国語Ⅰ」のみ）。

「国語総合」においては、各領域の指導が調和的に行われるよう、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域に関して次のように指導時数の目安を示した。

- ・ 「話すこと・聞くこと」を主とする指導に15単位時間程度を配当
- ・ 「書くこと」を主とする指導に30単位時間程度を配当

(2) ペーパーテスト調査結果の主な特色

① 過去同一問題についての分析

全問題数	同一問題数	前回は有意に上回るもの	前回と有意に差がないもの	前回は有意に下回るもの
47	10	1 <10.0%>	4 <40.0%>	5 <50.0%>

通過率が前回調査（平成14年度調査）を有意に上回った問題は、「言語事項」の1問、通過率が前回は有意に下回った問題は、「読むこと(古典(古文))」の3問と、「言語事項」の2問である。

<読むこと(古典(古文))>

古典の古文を題材とした[B3]のうち、「読むこと」の領域の4問は前回調査と同一の問題を出題した。結果は、通過率が前回と有意に差がないものが1問[B3五]、有意に下回った問題が3問[B3三、四、六]であった。

文章の内容を叙述に即して的確に読み取る問題[B3三]は、前回調査では通過率63.6%、無解答率12.5%であったが、今回は通過率57.9%、無解答率20.9%で、通過率で5.7ポイント

下回り、無解答率で8.4ポイント上回る結果となっている。

設定通過率との比較でも、前回調査では設定通過率と同程度と考えられた問題のうち2問〔B〔3〕三、五〕や、関連して出題した言語事項(文語のきまり)2問を含め、全6問中5問で通過率が設定通過率を下回ると考えられる結果となった。無解答率も増加傾向にあり、古文を読み取る力に関しては、一層課題がみられる結果となった。

学習指導要領解説では、言語事項としての文語のきまりについて「古文を読むことの学習に役立つように指導する」とある。クロス集計によると、文語のきまりを尋ねた問題〔B〔3〕一、二〕に2問とも正答した生徒の45.3%は、文章の内容を読み取る問題〔B〔3〕三～六〕を4問とも正答しているが(3問正答した生徒も含めると80.6%)、〔B〔3〕一、二〕の両問とも正答できなかった生徒でその後の4問すべてを正答できたのは6%に過ぎない(3問正答した生徒を含めても21.9%)という結果が出ている。文語のきまりなど古文の基礎的な事項が身に付いているかどうか、本文全体の内容を読み取る力にも影響しているものと考えられる。

なお、〔B〔3〕〕の場合、文章の読み取りが生徒にとって難しいと考えられる部分には、本文の右側にポイントを落としたゴシック体で現代語訳を付けている。これは、一字一句の瑣末な部分にこだわることなく本文を読めるようにし、問題を解く段階までの読みに差が出ないようにするためである。また、設問においても、語の意味に関する知識の差が解答に影響しないように、問うている語句の内容をあらかじめ説明する〔B〔3〕三〕という工夫をしている。

そのような配慮にもかかわらず、通過率が低下し、無解答の生徒が増加するという結果になっている。クロス集計も考え合わせると、古文を読むための基礎的・基本的な知識・技能が十分身に付いておらず、本文の内容が読み取れなくて正答を導き出せなくなっている生徒が、前回に比べ増加したことをうかがわせる。この状況を改善するためには、古典を読むための知識・技能を確実に身に付けさせていくことが望まれるところであるが、訓読註釈的な古典の授業が古典嫌いの生徒を生み出した轍を踏まないよう、古典を読む意欲をまず高めることが大切である。古典への学習意欲を高める取組の中で、知識・技能も身に付けさせていくようにしたい。

<言語事項>

言語事項については、訓読のきまりを基にして熟語を書く〔B〔4〕四〕で通過率が前回は有意に上回り、漢字の問題2問で通過率が前回は有意に下回った。

漢字を書く問題では「設ける」〔B〔4〕一・三〕の通過率が前回より5.5ポイント低下して61.3%(無解答率は29.6%)となり、前回は有意に下回った。「設」の字は、「建設」や「設備」など熟語としては日常目にする機会が多いが、訓読みである「もうける」という語に接する機会が少なく、字の意味や漢字表記が定着しにくくなっているものと考えられる。この傾向は「平成16年度特定の課題に関する調査」でも指摘されており、小学校第6学年の「設ける」を書く問題で、正答率が34.3%、無解答率が53.4%という結果となったこととも共通している。

② 内容・領域別にみた分析

通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題は、全47問中35問であり、全体の3分の2以上を占めている。下回ると考えられる12問のうち9問が古典に関する問題である。

内容・領域	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
話すこと・聞くこと	4	2<50.0%>	2<50.0%>	0<0.0%>
書くこと	2	1<50.0%>	1<50.0%>	0<0.0%>
	関連して出題した言語事項	1	0<0.0%>	1<100%>
読むこと	近代以降の文章	10	6<60.0%>	4<40.0%>
	古典	8	1<12.5%>	2<25.0%>
	関連して出題した言語事項	4	0<0.0%>	4<100%>
言語事項(単独で出題)	18	13<72.2%>	3<16.7%>	2<11.1%>
合計	47	23<48.9%>	12<25.5%>	12<25.5%>

<話すこと・聞くこと>

「話すこと・聞くこと」の問題は、すべての問題で通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。現行学習指導要領において、15単位時間程度という指導時数の目安を示したり、言語活動例を示したりしたことの成果が現れているものと思われる。

[A¹四]は、発表を聞いた後に、考えを深めるために質問するという設定の記述式問題である。問題が異なるので単純に比較することはできないが、前回調査の「話すこと・聞くこと」に関する問題での記述式問題では、設定通過率50%に対して40.9%の通過率だったが、今回は、設定通過率50%に対して52.1%の通過率となった。一方、無解答率は前回調査13.8%に対して今回は21.1%であった。正答率、無解答率ともに割合が増加したという結果となった。

なお、[A¹]の問題について履修していると回答した割合は、61.2%であった。より一層、この領域の指導を意識的に行っていくことが望まれるところである。

<書くこと>

「書くこと」の問題は、2問とも通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる結果であるが、関連して出題した、手紙文の頭語を書くという言語事項の問題[B¹二1]では、設定通過率60%に対して、通過率24.3%であった。

この問題は、手紙文の構成について理解し、適切な用語を使うことを出題のねらいとしている。学習指導要領「国語総合」の「3 内容の取扱い」には、「書くこと」の指導に関して「相手や目的に応じて適切な語句を用い、手紙や通知を書くこと」という言語活動例が示されている。教師質問紙調査をみると、調査時点までに手紙や通知を書くことを指導したという教師は70.2%であり、前回より10.7ポイント増加しており、言語活動例を示した成果が現れているといえる。ただ、[B¹]の問題について履修していると回答した割合は、63.2%であった。

手紙や通知を書く際には、相手意識を明確にし、目的に応じた表現をすることが必要である。また、効果的な伝達を行うためには、それにふさわしい形式や用語があり、頭語や結語も例外ではない。[B¹二1]の結果をみると、生徒の66.9%は頭語である「拝啓」を言葉(音)としては分かっている。しかし、仮名との交ぜ書きも含めると42.6%の生徒がそれを正しく漢字で表記することができない。生徒の解答をみると、「啓」を「敬」と書き誤っているものが多い。この誤りには、実際に頭語を書いた経験が少ないこととともに、「拝啓」という語の意味や、「啓」という漢字の意味を知らないことも影響していると思われる。語彙指導においては、語句や漢字の意味を指導することが大切であり、「啓」の意味が理解できていなければ、古典に出てくる「啓す」の意味も定着しにくいのではないだろうか。

なお、クロス集計によると、[B¹二1]を正答している生徒のうち76.1%が手紙文を書く[B¹二2]も正答しているという結果が出ている。このことから、手紙を書く際に必要とされる基礎的・基本的な言葉を身に付けている生徒の多くは、相手意識を持った適切な手紙文も書くことができると考えられる。

<読むこと>

近代以降の文章を題材とした問題は、すべての問題で通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。一方、古典を題材とした問題では、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数は8問中3問であり、全体の問題数の半数に満たない。

古典の言語事項に関する問題は、前回調査では別個にまとめて出題していた。今回は文語のきまりに関する知識・技能を読むことに生かすという学習指導要領の趣旨を踏まえ、古典を題材とした[A³一、二]、[B³一、二]の4問を出題した。結果は、4問すべてで通過率が設定通過率を下回ると考えられるものとなった。

・近代以降の文章を題材とした問題

論説的な文章の内容を叙述に即して的確に読み取ることをみた[A²三]では、設定通過率70%に対して通過率69.9%であり、文章の内容を叙述に即して的確に読み取ることはおおむねできている。ただ、全体の約30%に及ぶ誤答について生徒の解答をみると、誤答のほとんどが問いが要求していることとは反対の内容のところからの抜き出しであった。

また、文学的な文章において内容が読み取れているかどうかをみた[B²二]においても、設

定通過率70%に対して通過率は75.9%であり、多くの生徒はその能力が身に付いている。しかし、この問題でも、文脈から言えば反対の内容にあたる間違っただ選択肢を全体の約10%の生徒が選んでいる。

これらの結果は、文章の部分は読めても、文章全体の展開や内容を的確に読み取ることができない生徒が一定数存在することを示している。文章全体を意識しながら読む能力の向上が求められる。

・ 古典(古文・漢文)を題材とした問題

(古文)

古文の言語事項については、係り結びに関する[B3]一は設定通過率60%に対して通過率40.3%、歴史的仮名遣いに関する[B3]二は設定通過率65%に対して通過率32.3%であり、2問とも通過率が設定通過率を下回ると考えられる。両問題とも古文学習の入門期には必ず学習する内容であり、質問紙調査において97.9%の教師が「文語文法を理解すること」を指導したと回答しているにもかかわらず、文語のきまりの定着という点に課題がみられる結果となっている。

係り結びについては前回の調査でも出題しており、通過率は設定通過率と同程度と考えられる52.7%であった。今回とは問題が異なるので直接の比較はできないが、文語のきまりに関する基礎的な知識・技能が身に付いている生徒の割合が減少してきているように思われる。

解答の状況を見ると、2問とも、あらかじめ想定した解答以外の解答(解答類型9)が多く([B3]一では25.8%、[B3]二では54.8%)、その中身も極めて多様である。生徒の解答をみると、[B3]一では、「〈なり〉を文法的に適切な形に直して書きなさい」という問いに現代語や名詞で答えたり、[B3]二では、「読み方を現代仮名遣いで書きなさい」という問いに語の意味を答えたりしているなど、学習を進める上で必要な用語を十分理解していないために、正答にたどり着けなかったと思われるものもあった。

読み味を問う能力を問うものとしては、表現に即して人物の心情やものの考え方を読み取る[B3]五、六を出題した。この問題の通過率は44.8%と35.5%で、ともに設定通過率を下回ると考えられる。この問題では本文中の和歌の内容をとらえることが求められるが、そのためには、基本的な古語や和歌の修辞法に関する知識・技能を身に付けていなければならない。この両問の通過率が設定通過率を下回ると考えられる結果となったのは、そのような基礎的・基本的な知識・技能が身に付いていなかったためと思われる。

(漢文)

漢文を題材とし、登場人物の心情を尋ねた選択式の問題[A3]五は、設定通過率60%に対し通過率は51.8%であった。生徒の半数近くが、この問いを解答するためには欠くことのできない反語表現を理解できず、話の内容を十分読み取れていないと思われる結果となった。

[A3]では、書き下し文を書くなど2問の漢文に関する言語事項を出題しているが、クロス集計によると、この2問[A3]一、二とともに正答であった生徒(全体の33.8%)のうち84.7%は、他の読むことの4問[A3]三～六のうち3問以上に正答している。一方、言語事項の問題を1問も正答できなかった生徒(全体の34.7%)の80.7%は、他の読むことの4問についても2問以下の正答にとどまっている。この結果をみると、漢文を読んで理解するためには、漢文を訓読するための知識・技能など、漢文を読むための基礎・基本をしっかり身に付ける必要があることが改めて浮かび上がってくる。

自らの経験や知識と重ね合わせて、文章を読み解く鍵となる二つの語の具体的な内容について記述する[A3]六は、設定通過率50%に対して通過率は33.3%にとどまり、無解答率も46.4%と高い。クロス集計によると、[A3]一～五の5問すべてに正答した生徒のうち50.2%(4問正答の生徒も含めると76.4%)が[A3]六を正答し、無解答率も全体からみると3.4%(4問正答の生徒を含めると8.9%)にとどまっている。この結果をみると、文章を読んで理解できていることが、記述問題に意欲を持って取り組むことにもつながるのではないかと思われる。

<言語事項>

「言語事項」は18問を単独で出題した。そのうち通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが16問、下回ると考えられるものが2問であった。

漢字の読み、書き、目的や場に応じた話し方や言葉遣い、文章の組立てなどの知識・技能については、おおむね身に付いていると考えられる。

ただ、国語の語彙の構造的な仕組みを尋ねた〔B〔4〕五〕では、通過率が27.5%で設定通過率を下回ると考えられる。解答の状況をみると、正答である解答類型1（多様な文字体系の混在に言及して解答しているもの）に該当する、和語や漢語などの語種に着目して解答した生徒は全体の7.4%にとどまり、無解答率も、文字や表記の特徴を尋ねた〔A〔4〕五〕の16.1%に比べて40.2%と高い。学習を進める上で必要な用語の理解も含めて、国語の語彙に関する知識・技能が十分に身に付いていないことが分かる。国語の成り立ちや特質、言語の役割などについては、今後とも一層の指導の充実が求められる。

③ 評価の観点別にみた分析

評価の観点別に通過率と設定通過率を比較すると、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題は、「関心・意欲・態度」は8問中6問、「話す・聞く能力」、「書く能力」は全問題6問、「読む能力」は18問中13問、「知識・理解」は23問中16問であった。

評価の観点	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
関心・意欲・態度	8	1<12.5%>	5<62.5%>	2<25.0%>
話す・聞く能力	4	2<50.0%>	2<50.0%>	0<0.0%>
書く能力	2	1<50.0%>	1<50.0%>	0<0.0%>
読む能力	18	7<38.9%>	6<33.3%>	5<27.8%>
知識・理解	23	13<56.5%>	3<13.0%>	7<30.4%>
合計	55	24<43.6%>	17<30.9%>	14<25.5%>

(注) 複数の観点にまたがる問題があるため、前記の表の問題合計数と異なる

「関心・意欲・態度」の半数の問題の通過率が設定通過率を下回ると考えられるものであった前回調査に比べ、この観点での指導の改善がみられる。今回、下回ると考えられる問題は、漢文を読んで身近な生活に関連付けて記述する〔A〔3〕六〕と、国語の語彙の構造的な仕組みについて記述するもの〔B〔4〕五〕とであった。

「話す・聞く能力」、「書く能力」は、今回新たに領域が設定され、合わせて学習指導要領で指導時数の目安が示された領域の能力である。これらを踏まえた指導の成果が、この領域で育成を目指す能力をみた全問題で、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる結果となって表れたといえる。

「読む能力」については、通過率が設定通過率を下回ると考えられるもの5問すべてが古典を読む問題であることから、近代以降の文章を読む能力に比較して古典を読む能力が身に付いていないことが顕著に表れている。

「知識・理解」については、「言語事項」として単独に出題したものでは、おおむね通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。一方、古典を読むことと関連して出題した、文語のきまりや訓読のきまりについては、全4問で通過率が設定通過率を下回ると考えられ、古典の文章を読む際の言語事項の活用という点で課題がみられる。

④ 問題形式別にみた分析

全47問中、「選択式問題」と「求答式問題(選択式でも、記述式でもない問題を指す)」とが各19問、「記述式問題」が9問である。「求答式問題」と「記述式問題」では、ともに約3分の1の問題で通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

問題形式	問題数	設定通過率との比較		
		上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
選択式	19	11<57.9%>	5<26.3%>	3<15.8%>
求答式	19	11<57.9%>	2<10.5%>	6<31.6%>
記述式	9	1<11.1%>	5<55.6%>	3<33.3%>

通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題は、無解答率も高い傾向にある。求答式・記述式の問題において、通過率が設定通過率を下回っていると考えられる問題は9問あるが、そのうち8問で無解答率が15%を超えている。前回調査では、無解答率が15%を超えた問題を「無解答率が高い」と考えた。前回これに該当する問題は、求答式・記述式の問題、全22問中7問(31.8%)であったが、今回は全28問中13問(46.4%)とその割合が増加している。

問題形式	問題数	無解答率ごとにみた問題数				
		15%未満	15%以上 25%未満	25%以上 35%未満	35%以上 45%未満	45%以上
求答式	19	13<68.4%>	5<26.3%>	1<5.3%>	0<0.00%>	0<0.00%>
記述式	9	2<22.2%>	2<22.2%>	2<22.2%>	2<22.2%>	1<11.1%>
合計	28	15<53.6%>	7<25.0%>	3<10.7%>	2<7.1%>	1<3.6%>

読むことの問題における記述式問題の無解答の状況をクロス集計してみると、近代以降の文章を題材とした[A2]五(無解答率27.1%)と、古典を題材とした[A3]六(無解答率46.4%)ともに無解答であった生徒は全体の20.8%に及んでいる。また、[A2]五で無解答であった生徒の80.2%が[A3]六も無解答である。同様に、[B2]五(無解答率32.2%)と[B3]六(無解答率44.8%)ともに無解答であった生徒は全体の22.2%、[B2]五で無解答であった生徒の69.5%が[B3]六も無解答である。このことから、文章を読んで記述することが求められているいずれの問題についても解答しない生徒が一定数存在しており、それが通過率に大きく影響していることが分かる。

記述式問題では、読んだり聞いたりしたことについて、自分なりに考えて書くということが求められている。ただ、[B1]一や[B1]二2のように無解答率の低い(それぞれ3.9%、14.0%)ものもある。これらは、内容が身近で比較的自由に書けるものであったということが影響していると思われる。また、古典のように、題材となっている文章の内容が読み取れないことが、無解答の要因となっていると考えられるものもある。さらに、いずれの記述式問題にも答えないという生徒もいる。このように、無解答の理由は多様であり、その対応は一律にはいかない。そこで、個に応じたきめ細かい指導が求められるのである。

⑤ 前回調査で課題とされた内容との関連

前回調査では、その結果を踏まえて次のような点を指導上の改善点として示していた。今回、これらの点がどのように改善されたかを概観する。

- ・ 国語の学習への「関心・意欲・態度」を高める指導を充実すること
- ・ 論理的思考力を育成する指導を充実すること
- ・ 表現に着目する力を育成する指導を充実すること
- ・ 社会人として必要とされる言語能力の基礎を育成する指導を充実すること

ア 国語の学習への「関心・意欲・態度」を高める

<古典>

前回調査でも古典の学習に対する「関心・意欲・態度」の向上が課題として指摘されていたが、生徒質問紙調査をみると、「古文は好きだ」、「漢文は好きだ」に「そう思わない」又は「どちらかといえばそう思わない」と否定的な回答をした生徒は依然として多い（今回調査では、古文72.6%、漢文71.2%。前回調査では、古文74.8%、漢文70.5%）。それが、ペーパーテスト調査の結果にも表れているのではないと思われる。

また、生徒質問紙調査の「古典と現代文の文章を読み比べること」については、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」という回答が14.5%にとどまっている。「人前でスピーチや説明をすること」や「人前で報告や発表などをする」という学習については、ともに半数を超える生徒が役に立つと思ったと回答しているのと対照的な結果となっている。生徒の多くが「普段の生活や社会生活の中で役に立つ」と思っていない古典の学習について、どのように学習の意義を感じさせ、学習の意欲を喚起するか、指導の改善が求められるところである。

<言語事項>

国語の語彙の構造的な仕組みを尋ねた〔B4〕五で、通過率が27.5%と低く、設定通過率を下回ると考えられる。この問題に関連する生徒質問紙調査「辞書や百科事典などを利用して調べること」では、肯定的な回答をした生徒の割合が前回調査に比べて減少している。

辞書や百科事典などを利用して調べること(生徒質問紙調査) (%)

年度	よく分かった	よく分からなかった	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった
平成17年度	32.0	15.8	29.5	32.5	50.8	9.6
平成14年度	41.8	15.8	31.6	33.4	56.2	12.5

漢字の問題では、〔A4〕一2（「環境」を読む問題、通過率は今回調査96.8%、前回調査97.9%）と、〔B4〕一3（「設ける」を書く問題、通過率は今回調査61.3%、前回調査66.8%）で、通過率が前回の通過率を有意に下回った。この問題に関連した生徒質問紙調査「常用漢字を書いたり読んだりすること」では、肯定的な回答をした生徒の割合が前回調査に比べて減少している。

常用漢字を書いたり読んだりすること(生徒質問紙調査) (%)

年度	よく分かった	よく分からなかった	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった
平成17年度	36.4	16.1	35.4	28.8	60.3	6.2
平成14年度	46.7	18.3	38.4	32.4	68.2	8.5

これらの結果をみると、国語そのもの、さらには国語の学習に対する関心・意欲を高める指導が一層求められる。

イ 論理的思考力を育成する

論理的に思考し、表現する力については、各問題の通過率、及び記述式問題の生徒の解答状況を見ると、多くの生徒に身に付いてきているように思われる。

〔B1〕一は、言葉遣いに関する二つの調査結果の共通点を、「年齢」「言葉」という二つの語句を使って説明する問題である。この問題の通過率は70.1%であり、設定通過率と同程度と考えられる。ここでは、グラフを読み、年齢ごとの言葉遣いの違いに着目し、調査結果の共通点を筋道の通った文章にまとめることが求められている。生徒の解答には次のようなものがみられた。

年齢の若い十六から十九歳では、「とても」・「なにげなく」のどちらについても「チョー」・「なにげに」という人が多いという結果になり、六十歳以上の人では少数であった。この結果を見て若者の言葉遣いの乱れがうかがえる。

この解答は、自分の感じたことが妥当な論理展開によって得られたものであることを、読み手に分かりやすく簡潔に表現する力が身に付いていると考えられる一つの例である。

また[B1]二2は、調査結果について考え、それを踏まえて相手にふさわしい言葉、表現を使って手紙の本文を書く問題である。この問題の通過率は68.4%であり、設定通過率を上回ると考えられる結果となった。生徒の解答には、言葉遣いのみならず、手紙の本文を段落分けした、組み立てや展開のしっかりしたものも多くみられ、読み手に内容を納得させ、同意させるための論理的な構成を工夫する力も身に付いてきていることが分かる。

[B4]三は、文章の組み立てを問う問題である。この問題の通過率は75.5%で、設定通過率と同程度と考えられ、説得力のある構成を考える力の基礎・基本も身に付いているといえる。

[B2]五では、文学的な文章の読みを深めて雅号を創作する問題であるが、ここでは、将来の希望について述べた文章と雅号の因果関係を的確に説明することを通して、自ら作った新しい語に魂や思想を与えていくことが求められる。この問題の通過率は60.1%であり、設定通過率と同程度と思われる。生徒の解答でも、既存の知識を土台にしつつ論理的な思考を組み立て、新たな言葉との出会いを経験していることを示すものが多くみられた。例えば「建築」からイメージを広げ、建物が人を健やかにしていくという意味を込めて「健築」という雅号を付けているなどがその例である。

ところで、[B2]五の無解答率は32.2%である。また、クロス集計結果から[B2]五に先立つ[B2]一～四の4問の正答数の状況を見ると、4問とも正答であった生徒は全体の43.9%であった。そのうち、[B2]五も正答及び準正答であった生徒は70.2%(全体の30.8%)であるのに対し、無解答であった生徒も23.6%(全体の10.3%)に及んでいる。テキスト内部の情報にとどまらず、それ以外の知識や経験を引き出し、考えることが求められるこの問題は、何が書いてあるかを読み取る力だけでは対応できないことを示している。

論理的に思考し、表現する力はおおむね身に付いてきている一方で、[B2]五の無解答の状況から分かるように、PISA調査の「読解力」等で求められている「テキストの内容の熟考」につながるような点において、なお課題が残っているように思われる。

ウ 表現に着目する力を育成する

近代以降の論説的な文章を読む問題では、筆者の考え[A2]一、文章の要点[A2]二、文章の内容[A2]三をそれぞれ叙述に即して的確に読み取る問題、文章の構成や段落の働きを確かめる[A2]四問題すべてで、また、近代以降の文学的な文章を読む問題では、人物の心情を表現に即して読み味わう[B2]一、文章の内容を叙述に即して的確に読み取る[B2]二、文章の構成を確かめ、書き手の意図をとらえる[B2]三、人物の心情を表現に即して読み味わう[B2]四問題すべてで、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる結果となっている。

近代以降の論説的な文章を読む問題では、本文の内容を踏まえて、ある「一言」を取り上げ、それにまつわる自らの体験や見聞を記述する問題[A2]五を出題した。この問題の通過率は56.9%で、設定通過率と同程度と考えられる。生徒の解答には、実生活の中での「一言」を取り上げ、自分自身の考えの変化を簡潔に表現している次のようなものもみられた。

(一言)「ずっと弱いままではいけないだよ。」
(影響)「中学校の時、私は剣道部でした。部活の練習で、『すごくつかれた』や『腕が痛い』という理由をつけて見学する私に顧問の先生が言ってくださった言葉です。それを言われてから、私の部活に対する姿勢が真剣なものに変わり、あまり弱音を吐かなくなりました。」

このように、近代以降の作品を読むことにおいては、叙述に即して的確に読む能力が身に付

いており、書き手の考えの進め方や表現意図をとらえたり、自分の考えを深めたりする力を育成するという点について指導の改善がみられる。

エ 社会人として必要とされる言語能力の基礎を育成する

[A1] の放送では、二人の生徒が発表した後に、聴いていた生徒が質問する場面がある。それを踏まえて、発表した生徒に対して質問させる問い [A1四] を出題した。この問題では、「二人の発表のどの内容に関連しているかが示されている」、「カメラ付き携帯電話に関する具体的な質問をしている」、「『です』、『ます』などを使い、話し言葉で書いている」の3つの条件をすべて満たした解答を正答とした。この問題の通過率は52.1%で、設定通過率と同程度であると考えられる。

生徒の解答には、ねぎらいの言葉、質問項目の予告、発表内容的確な引用、そして質問内容を適切に組み合わせて表現している次のようなものがみられた。

わかりやすい発表で大変良かったと思います。3番の、カメラ機能の長所と短所の説明について質問があります。先程「盗撮のおそれのあるところへの持ち込み禁止が考えられている」と言われましたが、これを実施する場合、どのような基準でそういった場所を具体的に決めるのですか。

手紙文を書く [B1二2] の通過率は68.4%で、設定通過率を上回ると考えられることから、手紙や通知を書く力はおおむね身に付いていると考えられる。このことは、生徒質問紙の「手紙や通知などを書くこと」において、「普段の生活や社会の中で役に立つと思った」と回答した生徒が前回調査より増加傾向にある(今回調査47.6%、前回調査44.8%)ことにも表れている。

ただ、情報通信手段が多様化する中で、頭語については依然として定着しにくい状況が続いていると考えられる(今回調査24.3%、前回調査34.9%。前は平仮名書きや交ぜ書きも準正答としているので単純には比較できない。前回漢字で正しく書けたのは22.4%)。

その一方で、電話による対話場面を設定し、敬語など、目的や場に応じた言葉遣いを問うた [A4二]、[B4二] では、通過率が設定通過率を上回っていると考えられる結果となっている。

これらの点から、社会人として必要とされる言語能力の基礎を育成する指導については、一部に課題は残っているものの、おおむね成果を上げてきているといえる。

⑥ 国際調査との比較

PISA 調査の結果を受けて、文部科学省は『読解力向上に関する指導資料』を刊行した。その中で平成13年度小・中学校教育課程実施状況調査と関連して5つの課題を挙げているが、ここでは、そのうちから3つを取り上げる。

ア テキストの表現の仕方や表現意図に着目する

2000年の PISA 調査の公開問題例「警察に関する問題」の問3では「この文章で筆者の最大の目的は何ですか。次のうちから一つ選んでください。」という、書き手の意図を尋ねる出題(選択式)があった。結果は OECD 平均の正答率80.5%に対して、日本の正答率は50.4%であった。これはテキスト全体を踏まえて書き手の意図や目的をつかみ、それに基づいて理解し解釈する力に問題があることを示している。今回の調査では、これに類似した問題として、[A1二]、[B2三]がある。

[A1二] は、「二人はどのような意図でこの発表をしたと考えられるか。」という発表の意図を尋ねた問題である。通過率は63.3%で、設定通過率と同程度と考えられる。しかし、解答状況をみると、話された内容の一部のみに触れた選択肢1を選んだ生徒が24.1%いた。

[B2三] は、文章の流れを踏まえて、直接には表現されていない、主人公の伯父の心情をとらえる問題である。通過率は66.5%で、設定通過率と同程度と考えられる。しかし、全体の23.6%が傍線部の「しんみり」という語の解釈、言い換えれば筆者がなぜこの語を用いたのかを十分理解しないまま、安易に選択肢2を選んでいく。

このことは、一部の生徒ではあるが、PISA 調査で指摘されたことと同様に、テキスト全体を踏まえて書き手の表現意図をとらえ、それに基づいて理解を深めていくことに課題があるということを示している。

イ 非連続型テキストを読み、表現する問題

[B¹一] は、2000年の PISA 調査の公開問題例「プラン・インターナショナルに関する問題」との比較で興味深い。[B¹一] は A、B それぞれに二つのグラフを比べ、さらに A、B のグラフ間の相違や共通点に気付かせる問題である。一方、「プラン・インターナショナルに関する問題」は 9 か国、27 項目もの比較をさせ差異を読み取らせる問題となっている。両問題の共通点は、ともにグラフを読み取り、その内容を踏まえて解答する問題となっている点であるが、PISA 調査では、グラフの読み取りの段階では評価はせず、読み取った情報に解釈を加えた段階で評価するという点が [B¹一] と異なる。

PISA 調査問題の完全正答率は 4.3% (OECD 平均は 3.3%)、部分正答を合わせると 44.2% となる (OECD 平均は 27.7%)。一方、[B¹一] でグラフを正しく読み取って説明した正答者は 70.1% で、さらに [B¹一] のグラフを踏まえて [B¹二 2] にも正答した者は、[B¹一] の正答者の 75.3% (全体の 49.2%) に達している。このことから、グラフを正しく読み取り、かつ読み取った内容を踏まえて表現する能力が身に付いている生徒はかなりいるといえる。

今後の課題は、PISA 調査のような複雑なグラフを読み取り、そこから得た情報をもとに解釈し、熟考・評価して論理的に述べる力の育成ということになる。

ウ テキストに基づいて自分の考えや理由を述べる・テキストから読み取ったことを再構成する能力

2000年の PISA 調査の公開問題例「贈り物」の問 3、5、7 は、文学作品を読み取った上で、解釈したり、推論したり、評価したりしたことを表現する問題であり、日本の正答率は OECD 平均と同程度かそれを下回るという結果となった。これと同趣旨の問題が、雅号を作り説明する [B²五] である。[B²五] の通過率は 60.1% で、設定通過率と同程度と考えられる結果であった。しかし 32.2% という無解答率の高さを考えれば PISA 調査で指摘された課題を抱えた生徒が一定数存在していると思われ、こうした生徒への対応が求められる。

(3) 質問紙調査の結果の概要

① 生徒質問紙調査

○国語への意識や理解度

「国語の勉強は大切だ」について、「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と肯定的に回答した生徒の合計は 86.4% (前回調査では 81.9%) であった。一方、「国語の勉強が好きだ」について、肯定的に回答した生徒の合計は 47.7% (前回調査では 45.2%) にとどまっている。国語の学習に対して生徒の大半が「大切だ」と考えていながら、「好きだ」と感じている生徒はそれに比べて少ないという、前回調査と同様の傾向がみられた。ただ、肯定的に回答した生徒は増加傾向にある。

また、「お互いの思いや考えをうまく伝え合うことができるよう、国語を勉強したい。」(生徒質問紙)という質問に対して肯定的に回答した生徒が、前回調査に比べて 8.6 ポイント (今回調査 64.6%、前回調査 56.0%)、「国語を勉強すれば、私は、お互いの思いや考えをうまく伝え合うことができるようになる。」(生徒質問紙)という質問に対して、肯定的に回答した生徒が、前回調査に比べて 7.2 ポイント (今回調査 66.7%、前回調査 59.5%) 増加している。この傾向は、平成 15 年度小・中学校教育課程実施状況調査においてもみられ、現行学習指導要領における「伝え合う力」を高めることを重視する指導の成果といえる。

「国語を勉強すれば、私は、お互いの思いや考えをうまく伝え合うことができるようになる。」の質問に、「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合

	平成13(14)年度調査	平成15(17)年度調査
中学校第2学年	59.4%	62.4%
高等学校第3学年	59.5%	66.7%

()内は高等学校の実施年

国語の学習内容の理解に関しては、「国語の授業がどの程度分かりますか」について、「よく分かる」又は「だいたい分かる」と肯定的に回答した生徒の合計が54.5%(前回調査では52.0%)で、前回調査と同様の傾向がみられる。

このように、全般としてみれば、国語の学習の意義や意欲について肯定的な回答をしている生徒が増加している。しかし、ここまで述べてきているように、古典をはじめとした個々の学習内容や活動では、必ずしも学習の有用性が実感されておらず、関心や意欲も低いという状況もみられ、それが学習内容の理解にも影響していると思われる。そこで、指導に当たってはこのことを踏まえ、それぞれの学習活動において、発見・気づきの喜びや分かる楽しさを味わわせ、実生活や今後の学習にどのように役立つのかを実感できるような工夫を凝らしていくことが大切である。

○国語の学習と進路との関係に対する意識

「国語を勉強すれば、私の入学試験や就職試験に役立つ」について、肯定的な回答をした生徒の割合は、68.7%(前回67.4%)で、国語の学習の意義や必要性についての意識は前回調査と同様に高いという傾向がみられた。

また、「入学試験や就職試験に役立つよう、国語を勉強したい」、「自分の好きな仕事につけるよう、国語を勉強したい」について、肯定的な回答をした生徒の割合は、59.5%(前回調査55.3%)、52.8%(前回調査46.9%)で、それぞれ4.2ポイント、5.9ポイント増加しており、進路にかかわっての生徒の国語についての学習意欲は向上傾向にある。

得点との関連では、いずれの質問においても前回調査同様、肯定的な回答をした生徒の方が、否定的な回答をした生徒より高い得点を示す傾向がみられた。

このようによい方向に向かっている生徒の意識を踏まえ、一人一人の生徒に自己の進路にとって国語の力は不可欠なものであることを更に深く認識させ、社会人として必要とされる総合的な言語運用能力の育成を着実に図っていくことが大切である。

② 生徒質問紙調査と教師質問紙調査との比較

○生徒と教師の意識差

生徒と教師との意識差が明確にみられたものに、「人前でスピーチや説明をすること」と「文学的な文章を読むこと」とがある。

「人前でスピーチや説明をすること」について、教師の約半数は「生徒は興味を持ちやすい」と答えているのに対して、生徒の半数以上は「きらいだった」と答えている。しかし一方で、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と半数以上の生徒が答えており、学習の有用性については教師との意識差はないと言える。つまり、生徒はこの言語活動の意義や必要性は認めているものの、その学習は嫌いなのである。見方を変えれば、3分の1を超える教師が「生徒は興味を持ちにくい」と答えているのは、学習活動の中で生徒のそのような思いを切実に感じているからなのかもしれない。この傾向は前回調査と同様の傾向であり、この言語活動については、一層の指導の改善が求められる。

そのためには、まず、指導が単発的で、単調なものとなっていないか、生徒に必然性を感じさせるものになっているか、実生活や学習活動の様々な場面で活用できるものになっているかなどの視点で、指導の在り方を見直す必要がある。

人前でスピーチや説明をすること(生徒質問紙・教師質問紙)

	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった
生徒	9.4%<10.4%>	56.6%<47.7%>	51.7%<44.0%>	8.1%<13.7%>
	生徒は興味を持ちやすい	生徒は興味を持ちにくい	※< >内は平成14年度調査結果	
教師	48.1%<52.5%>	34.7%<36.6%>		

「文学的な文章を読むこと」についても同様の意識差がみられるが、こちらの方は生徒の意識が複雑で、学習の好悪、意義とも、肯定、否定の回答が拮抗している。これは平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査でみられたのと同様の傾向である。実社会では、様々な場面で、単なる教養にとどまらず、文学的な文章を読むことによってはぐくまれる豊かな情緒や感性の大切さが再認識されてきており、このようなことも踏まえた指導の改善が求められる。

文学的な文章を読むこと(生徒質問紙・教師質問紙)

	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった
生徒	29.6%	40.7%	30.3%	23.8%
	生徒は興味を持ちやすい	生徒は興味を持ちにくい		
教師	64.3%	13.0%		

指導に当たっては、このような生徒の意識に十分配慮する必要がある。具体的な指導においては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれの授業においても、ともに学び合う中から自分の力が伸びたと意識できるような指導を通して学習の成就感を味わわせ、対人関係能力やコミュニケーション能力、ひいては伝え合う力、生きる力の伸長へとつなげていくことが大切である。

前回調査では意識差が顕著であった「自分で話したり書いたりしたものを自己評価したり、生徒同士で相互評価したりすること」については、依然として意識差は存在するが、前回調査よりその差は小さくなっており、指導の成果がうかがえるところである。

○読書活動の状況と問題点

前回調査では、生徒の本への興味が読書行動へと結び付いていない実態を改善するため「個々の生徒に応じた取組」や『『読んでみたい』と思わせる指導や環境づくり』が提言された。

今回の教師質問紙調査結果をみると、「読書を習慣化させるための特別な取組を行っていますか」において肯定的な回答が8.5ポイント増加(今回調査42.4%、前回調査33.9%)しており、取組に一定の改善がみられる。しかし、教師による学校図書館を活用した授業に関しては、前回調査でも18.2%にとどまっていた肯定的な回答が更に5.1ポイント減少しており、教師質問紙と生徒質問紙のクロス集計をみると、教師の取組が生徒の読書活動や図書館利用にほとんど影響を与えていないという結果が出ているなど課題も多い。

単なる「本を読みなさい」という押し付けの指導でなく、興味を持っているが読み始められない生徒への読書のきっかけづくり、また適切な内容の本が選べない生徒への読書の幅を広げ深める指導などができているのか、そしてそもそも本を手にとろうとしない生徒に読書への興味を喚起できるような構えが教師の側にあるのかなど、それぞれの生徒の実態に応じた具体的な指導の中身の再検討が求められる。

3. 今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点

○国語を学ぶ意義を明確にする

国語を学ぶ意義を明確にし、自ら進んで学ぶ態度や姿勢を育成する。

生徒の多くは国語の大切さを認識し、国語の学習に対する意欲も高まってきてはいる。一方、古典をはじめとして、国語の授業に対する興味ももてず、関心が低い生徒も少なくない。このことは、国語を学ぶことの意義が、すべての生徒に必ずしも十分認識されてはいないことを示している。教師自らが国語を学ぶ意義を明確に認識し、生徒にそれを適切に意識させる授業を展開することが大切である。分かる授業、自ら気付く授業、成長の実感が得られる授業、実生活に役立つと思える授業等を通して、生徒に学ぶ喜びや有用感を体験させたい。

また、国語を学ぶ意義を生徒が実感するためには、読書を通して活字に触れる機会を増やし、言語文化を享受し、主体的に考えたり創造したりする態度を育成することも大切である。読書は、語彙獲得や知識獲得等の機会であるばかりでなく、感性や情緒、思考力等を養う上で重要な活動であり、読書の喜びを知ることは生涯にわたっての大きな財産ともなる。これらの観点からも、読書を習慣化する取組や、生徒の読書の質を向上させる働きかけなどが必要である。

○伝え合う力を身に付けさせる

伝え合う力を広げ深めることで、考える力・社会性の涵養を目指す。

複雑化する社会の中では、言葉によって他者と触れ合うことがますます大切になってきており、今回の調査では、このことに対する生徒の認識も高まって来ていることが分かる。しかし、文章を読んで自分の考えを記述する問題で無解答率が高いなどの課題もみられた。そこで、他者との相互理解を深め社会性を養うためにも、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う力に重点を置いた学習が、グループ学習や生徒による相互評価など深い人間的交流を促すような学習形態を工夫することを通して、更に推進されなければならない。

その際、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の学習のみならず、「読むこと」の学習もテキストを通じた異質な他者との出会いであることを意識させたい。読むことの学習において、様々なテキストを比べて読み、また意見を交わし合うことで、生徒は深く考え、学び、表現し、知情意のバランスが取れた人間性をはぐくむことができるのである。このような学習を通して「伝え合う力」を広げ深めることで、考える力・社会性の涵養を目指していくことが必要である。

○根拠や証拠を踏まえた論理的表現力を育成する

根拠や証拠をテキストや資料から読み取って検討し(論証的思考)、自身の考えを筋道立てて相手に分かりやすく表現する力(論理的表現力)を育成する。

今回の調査では、前回調査で課題となった論理的な思考力を培う指導については一定の改善がみられたが、依然として、理由や根拠をもとに記述する問題で無解答率の高さが目立った。それは、2003年のPISA調査における我が国の高い無解答率と同様の傾向である。事実をもとに自分の考えを述べる学習は、小学校高学年から行われているが、テキストや資料から得た根拠や証拠を検討し、それを踏まえて自己の考えを論理的に表現する力はすべての生徒に十分定着しているとは言えない状況である。そこで、根拠や証拠をテキストや資料から読み取り、自分の意見を読み手に分かりやすく表現する力を一層育成する必要がある。

平成21年5月までには裁判員制度が施行され、20歳以上の国民が裁判員となる資格を有するなどという社会的な要請も考え合わせると、根拠や証拠をテキストや資料から読み取って検討していくことができる力(論証的思考力)や、自分の考えを筋道立てて分かりやすく表現するこ

とができる力（論理的表現力）は、これからの日本人に必須の国語力であり、その育成は喫緊の課題の一つである。そのためには、学習指導で扱うテーマの設定も、議論が分かれる「脳死」の問題をはじめとした人の死や生に直接関係するテーマなど、生徒が関心をもって考えることのできる時事的な話題も積極的に取り上げるなどの学習を積み上げていくことが大切である。

○古典の大切さを認識させる

古典の現代的な価値を理解させ、古典に親しむ態度と能力を育成し、日本人としてのものの見方、感じ方、考え方を広げ、深めさせる授業を実践する。

古典を学ぶということは、我が国の言語文化を継承・発展させていくために、そこに表れている古人のものの見方、感じ方、考え方を知ることであり、同時に自らの感情や思考を表現する様々な方法を身に付けて行くことでもある。このような学習を通して、生徒は自分の生き方を見つめるとともに進むべき方向を模索し、自らのアイデンティティーを確立していく。古典とは、急速に変化を続ける現代にあって、現在の自分の位置を確認する灯台でもある。

言語文化を継承することは、様々な言語活動を力強く、個性豊かにする原動力となる。そしてこのような言語文化への理解が、生徒の思考力を高め、論理的な意思伝達能力を支えるのである。そのために、古典の授業のみならずあらゆる機会をとらえて、古典と現代の言葉との関連を意識させたり、作品を通じて日本文化の価値を理解させたりすることで、古典に親しむ態度と能力の育成を一層図りたい。

古典を味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識・技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみを取り上げるのではなく教材等にも工夫を凝らしながら、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典に対する関心・意欲を高めることを重視したい。そして、そのような指導を通して、古典を理解するための基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせていくことが望まれる。

具体的な指導においては、敬語に代表される豊かな待遇表現、和文における五七調・七五調や漢文訓読体が生み出すリズム感、副詞の呼応や疑問・反語表現、和語と漢語が作り出す多彩な語彙など、現代日本語に深く根付いている古典を、生徒にしっかりと理解させる授業を実践する必要がある。またあわせて、日本語の語種や漢字の訓読み、旧暦や節句、旧国名など身近に生きている古典的な事柄を通して古典の現代的な価値を生徒に示し、古典が日本文化の土台にあることを実感させたい。

○基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせる

基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせるための指導を工夫し、理解力や表現力の基盤を確かなものにさせるとともに、学習への関心・意欲・態度を高める。

国語における基礎的・基本的な知識・技能には、実生活で必要とされる、要約・紹介・説明・記録・報告・対話や討論などの言語活動ができることなども含まれ、決して学習指導要領に示されている〔言語事項〕に限定されるものではない。今回の調査でも、文章を記述したり、古典を読んだりするための基礎的・基本的な知識・技能の定着が十分ではないこと、またこれらの学習への関心・意欲・態度が満足できる状況ではないことが明らかになった。基礎的・基本的な知識・技能は、それが身に付いていなければそれ以上先の学習に進むことができないものでもある。教師はそのことを十分意識し、生徒が常に基礎的・基本的な知識・技能の確認に立ち戻ることができるように、また、関心・意欲・態度を向上させることができるように学習指導の在り方を工夫する必要がある。

具体的には、まず常用漢字の読み書きをはじめとした語彙の指導が必要である。豊かな語彙

力は、理解や表現のための基盤となるものだからである。特に、日常あまり用いないが読んだり書いたりするためには欠かせない語や、訓読みの漢字の学習、言葉の使い分け等の指導を丁寧に行いたい。また、国語の学習を進める上で必要な用語の学習に配慮することも大切である。

次に、文章への関心を引き出し、文章の理解を確実にするための音読・朗読等の言語活動の充実を図る必要がある。古典に限らず音読・朗読に取り組むことは、文章に特有の調子・リズム・響きなどを味わうという点で効果的な学習である。また、学習に音読・朗読を取り入れることは、文章の解釈を深めるためにも、文章の理解を他者と共有するためにも効果的であると思われる。

国語の成り立ちや特質、言語の役割等についても学ばせる必要がある。言葉の変遷や表記の特徴、音韻や文法の特徴について学んだり、また認識・思考・伝達・創造といった言語が果たす役割について理解したりすることは、文章の読解にとどまらず、国語の仕組みや働きへの関心を高め、良好な人間関係づくり、国際化時代における日本人としての自覚を促すという点でも重要な学習である。